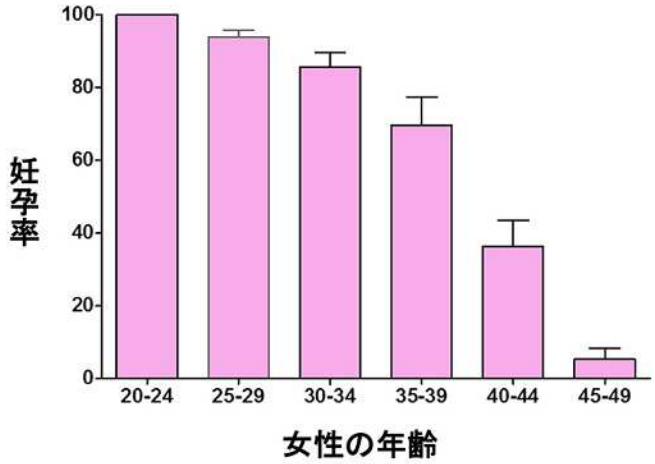
男女の年齢と妊孕(にんよう)性

妊孕(にんよう)性ー聞き慣れない言葉だと思いますが、単純に「妊娠する力」と考えていただければ良いかと思います。



右の図は女性の年齢の変化と妊孕率を示したグラフです。
年齢と共に妊娠する力は低下し、不妊の頻度は25歳～29歳では8.9%、30～34歳では14.6%、35～39歳21.9%、40～44歳では28.9%というデータがあります。従って、妊娠するためには、年齢と共に、何らかの治療が必要となる可能性が高まってきます。

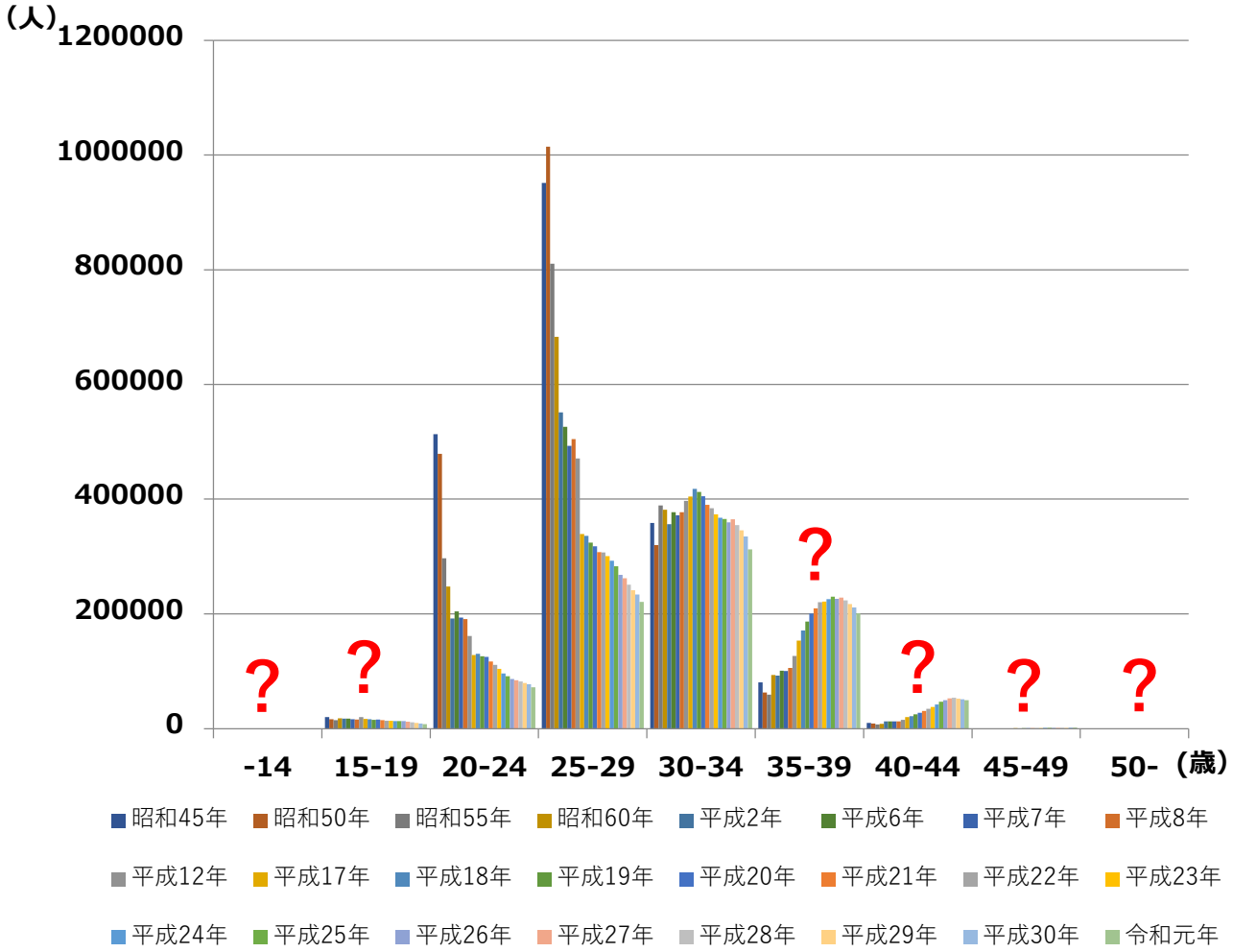
社会的に不妊は、女性にばかり向きますが、実は男性不妊も問題です。

WHOによると女性不妊41%、男性不妊24%、男女とも24%、原因不明11%で、不妊カップルの40～50%において、男性側にも原因があるのです。年齢と共に元気な精子の数は減り、体外受精の成功率は低下することが知られており、より高齢男性となると先天異常の発生も増えると考えられています。
更に、驚くことに世界的に精子数は減少する一途をたどっており、結婚前の男性の約10%で既に精液所見に問題があると言われています。今後、注目しておく必要があると思います。

（参考：①日本生殖医学会　生殖医療Q&A、②日本Men's Health医学会コラム、
③Oocyte donation for assisted reproduction,UpToDate, last updated: Sep 27, 2019.）

母の年齢別にみた出生数の推移（昭和45年～令和元年）

（厚生労働省人口動態統計より作図）



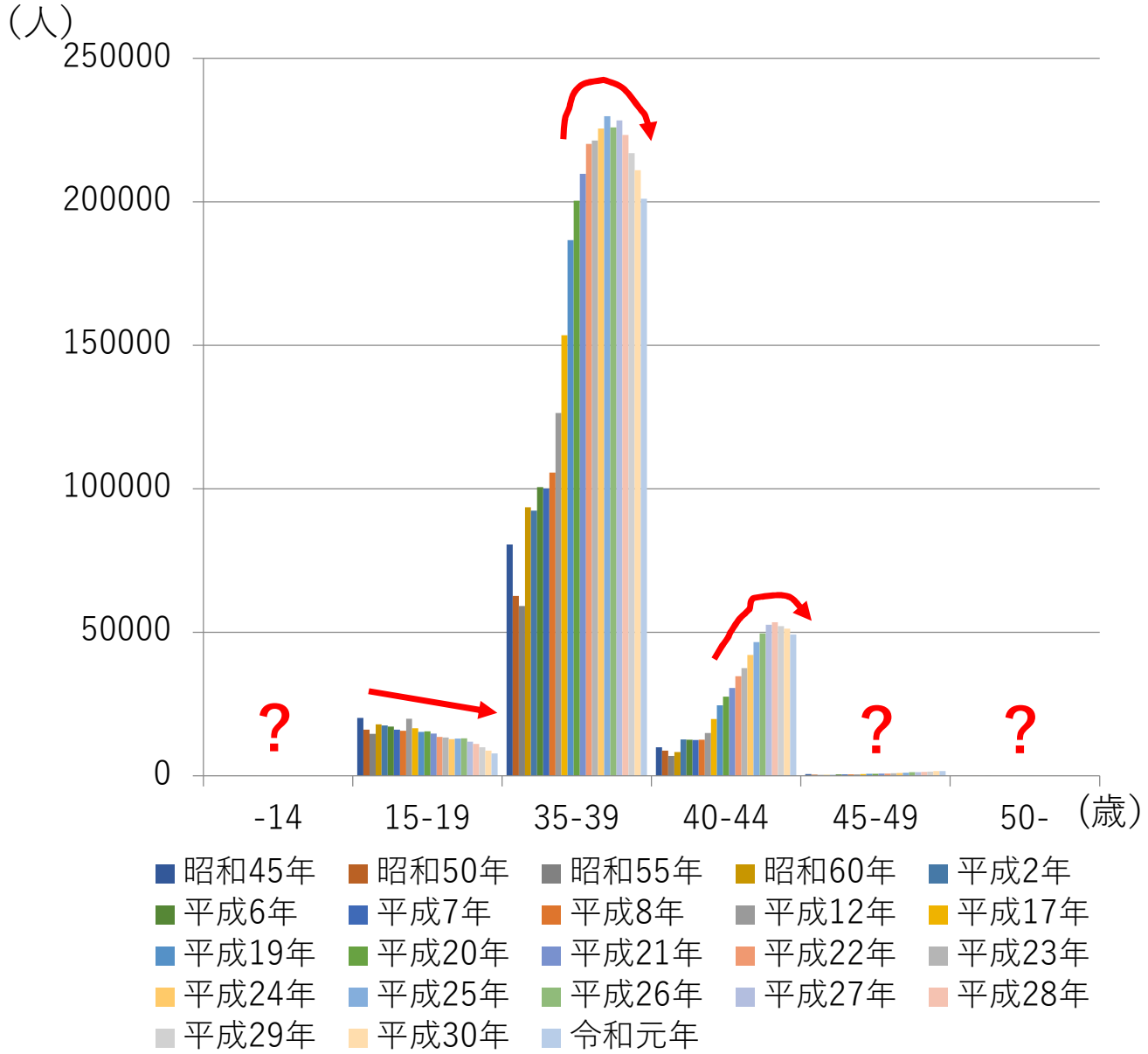
厚生労働省HPにある人口動態統計の数字をグラフにしてみました。
何度目の出産かは区別していませんが、出産時の母の年齢別出生数の推移です。

年齢層ごとに昭和45年から令和元年までの出生数を棒グラフにしています。

20歳代の出生数は、一貫して減少していることは明らかです。

また、30歳代前半の出生数は、平成18年をピークに減少に転じています。

次にそれ以外の年齢層に注目してみます。



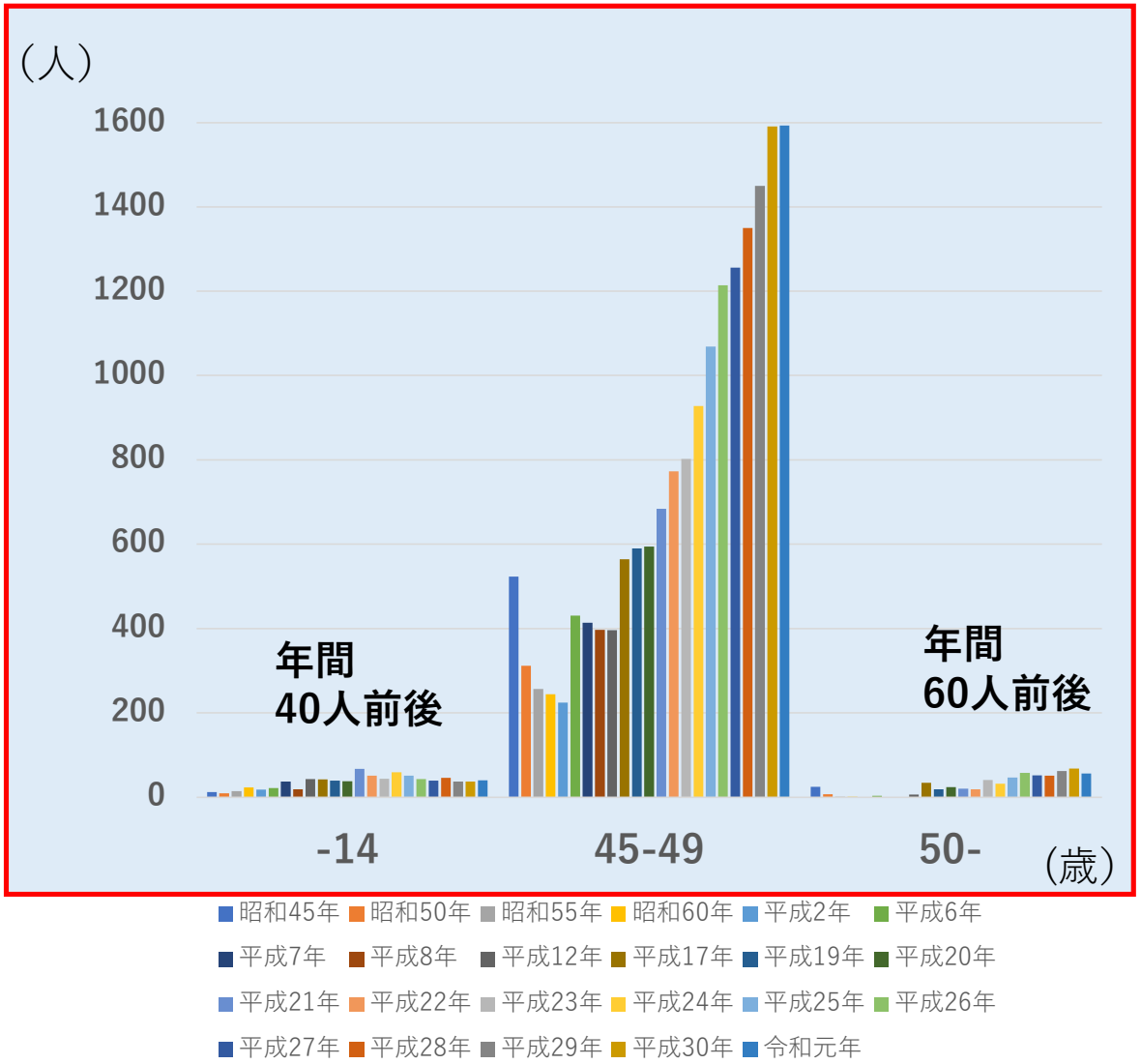
10歳代後半の母からの出生数は減少しています。

高齢出産の定義に入るのは35歳以降ですが、30歳代後半から40歳代前半の出生数は減少してきています。

10歳代の出産や高齢出産が問題とされてきましたが、このように最近は減少してきていることがわかります。

高齢出産には体外受精による妊娠も多く含まれていますので、恐らく**体外受精による出生数増加の限界**が見えているのではないでしょうか。

では、棒グラフに見えていない年齢層ではどうなっているのでしょうか？



10歳代前半の母の出生数は年間40人前後で推移。40歳代後半は年々増加し、年間1600人に達しています。
更に高齢の50歳以降（上限不明）では年間60人前後の出生数です。

実際の数字でみると、平成26年以降は、10歳代前半より50歳以降の母の出生数が上回っています。

日本人女性の平均閉経年齢は50歳、45歳以降は更年期といわれる卵巣機能の低下症状が現れてくる年齢層です。

なぜ、45歳以降での出生数が増えているのでしょうか。通常の体外受精では妊娠が難しい年齢ですから、
恐らく、少なからず、他人からの提供卵子（夫も高齢ならば提供精子も）を使った不妊治療による妊娠が含まれているものと推測します。

（文責・林和俊）